

発掘調査の概要

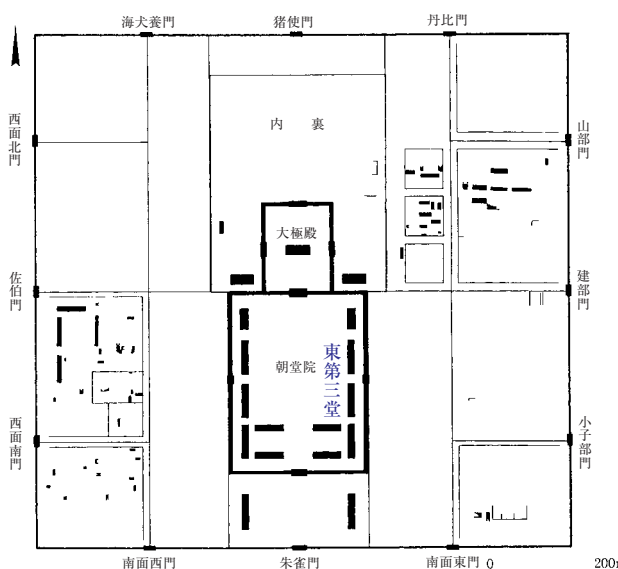
藤原宮朝堂院東第三堂（飛鳥藤原第132次）

藤原宮は持統8年（694）から和銅3年（710）までの16年間、持統・文武・元明の3代の天皇にわたって営まれた宮都です。今回の調査地は、国家的な政務や儀式・饗宴の場であった朝堂院地区。藤原宮の朝堂院は、南北320m、東西230mの広大な空間で、古代の宮都の中では最大規模を誇りました。朝堂院は複廊の回廊によって囲われ、内部には12の朝堂が左右対称に並び、前面には朝庭が広がっていました。

いま発掘している場所は、朝堂東第三堂の南半部です（下図参照）。12ある朝堂には役人たちの座が定められていました。平安時代の史料によれば、東第三堂は「承光堂」と呼ばれ、中務省・図書寮・陰陽寮に属する役人たちの座が設けられるとあります。

ところで、今回の発掘区では、すでに戦前に日本古文化研究所によって部分的な発掘がおこなわれています。今でこそ藤原宮の場所は周知のこととなっていますが、それも日本古文化研究所の精力的な発掘によるところが大きいのです。しかし、日本古文化研究所による発掘は柱想定位置をねらった限定的な調査であり、建物構造の細部などについては不明な点が多いというのが現状です。

そこで奈文研ではここ数年、藤原宮の大極殿院・朝堂院地区に6次にわたる再調査のメスを入れ、新事実を次々と明らかにしてきました。今回の調査もそうした流れにあるものです。



藤原宮復原図

約1000㎡の調査区を設定し、昨年12月のうちに重機による上土の掘削を終え、1月から本格的な調査に入りました。土を削ると、まず目につくのが、日本古文化研究所による調査の痕跡や、調査員の間で「ミゾミゾ」と呼ぶ中世以降の耕作溝です。それらを遺構カードに記録しながら掘り進めると、東第三堂が少しずつ姿を現してきます。礎石を据えるための根石・栗石の入った穴、建物から捨てられた瓦の堆積、朝庭部に敷かれた細かい砂などです。これらの状況から、東第三堂は瓦葺き礎石建ち建物で、屋根は切妻式、規模は南北15間（約62m）、東西4間（約12m）であったとみてよさそうです。今回は桁行9間分（約37m）が姿をみせており、なかなか見応えがあります。また、建物の棟通りにも根石・栗石が存在することを確認し、東第二堂と同じく床張りであった可能性がでてきました。

さらに、奈良時代から平安時代にかけての遺構も見逃せません。東第三堂の外側を中心に数多くの溝や、炭・土器を多量に含む巨大な上坑もしくは溝が広がり、建物がいくつか建っていたことが明らかになりつつあります。「忠富」と書かれた土器も出土しました。平城遷都後の藤原宮の土地利用のあり方を知る上で、貴重な情報が得られそうです。

真冬の現場で容赦なく吹きすさぶ風や雪。ふと思うのは、当時の役人たちのことです。元旦に天皇に拝礼をおこなう朝賀の儀では、役人たちは朝庭でじっと立っていなければなりません。我が身と重ね合わせながら、当時の役人たちに同情してしまいます。（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 市 大樹）



古文化研究所の調査トレンチ掘削後の状況（北から）

平城宮中央区朝堂院の調査（平城第367次）

平城第367次調査は、中央区朝堂院の朝庭部分の解明を目的として1月から実施しています。現在復原が進んでいる第一次大極殿の南側に調査区を設定しています。掘る手を休めて目を上げると北には復原が進む大極殿、南には朱雀門が目に見え込んできます。

中央区朝堂院は第一次大極殿の南に広がる平城宮の中心的な施設のひとつで、元日朝賀、即位式など国の重要な儀式の際に官人達の空間として、大極殿院と一体となって用いられました。

塀で囲まれた長方形の朝堂院の区画には、朝堂と呼ばれる南北に長い建物が東西対称に建ち並んでいます。建物の間は官人達が列立する広場で、ここを朝庭と呼びます。東側の朝堂部分については、既に調査が進んでいますが、朝庭部分の調査は未着手でした。そこで今回の調査では、その実態を明らかにすることを目的としています。

調査区は東西84m、南北24mの東西に長い方形で、面積は2016㎡です。

本調査のもうひとつの目玉として、下ツ道の確認があげられます。

下ツ道は、大和盆地を南北にほぼ直線に通る道路で、7世紀にはその存在が確認できます。平城京のメインストリートである朱雀大路は、この下ツ道を拡幅する形で造営されました。このことから平城京造営の基準ということが出来ます。

朱雀門の基壇の下からは、平城遷都に伴って埋

め戻された下ツ道の道路側溝が発掘調査によって発見されています。溝の中からは、木簡や墨書土器等、多量の遺物が出土しており、遷都直前のこの地域の歴史を考える上で重要な資料の一つになっています。

これらの課題に応えるべく、地中レーダーによる探査や、過去の下ツ道の調査成果を参照しながら、調査を開始しました。

2月17日現在の状況としては、小石を敷き詰めた面を確認しながら発掘を進めています。この面は奈良時代と考えることができ、朝庭は石が敷き詰められた状態であったのでしょうか。

今は、広い範囲が石で覆われた状態で、その下に存在する遺構の有無を確認することは難しい状況ですが、石が少ないところや、後世の耕作などで石敷が破壊されている部分では、遺構が見え隠れしています。このことを考えると、朝庭は常に広場の状態で使用されていたわけではなく、臨時の儀式等の際には、建物を建てる等の多様な利用方法がとられていた可能性があります。今後、石敷の下へと調査を進めていくことで、利用の実態が明らかになるかもしれません。下ツ道については調査区に設けた排水溝の検討から、想定される位置に溝が存在することが確認できました。もちろんこの溝が下ツ道にあたるのか、という問題は更に慎重な検討が必要です。

本格的な溝の調査は、奈良時代の遺構の調査後におこないます。従って現状では残念ながら検討可能な遺物等の出土はありませんが、調査の進展により更に新しい知見が得られることを期待しています。

また、竪穴住居と考えられる遺構も確認されており、平城宮以前のこの地区の状況を考える情報が得られるのではないかと期待しています。

寒さと風に悩まされ、雪の降る中の作業となったり、一日中凍りついた土が融けない日があるなど、厳しい気候の中での作業ですが、平城宮の中核の一角を明らかにすることを目的に地道に調査を続けていきたいと考えています。

（平城宮跡発掘調査部 金田 明大）



調査区から朱雀門を望む



(原寸)

阿弥陀浄土院の飾り金具

平城宮東院庭園の東隣り、法華寺阿弥陀浄土院跡から出土した建物の飾り金具です。上は、屋根を支える垂木の先端木口を飾った金具。厚さ1ミリにも満たない銅の薄板を鑿で透彫りにして、対葉花文と呼ばれる唐草文の一種が繊細に表現されています。他の二つは、扉や長押の装飾に用いられた金具で、釘の先端が材の裏に突き抜けたとき、あるいは釘の頭を覆い隠すためのものです。裏側には材に打ち付けるための3本の脚がつけられています。扉の材料を記した木簡から、奈良時代には「尻塞」と呼ばれていたことがわかります。

これらにはいずれも金のメッキがわずかに残っていて、金色に輝く堂宇の様子をうかがい知ることができるのです。

(平城宮跡発掘調査部 次山 淳)



調査地より復原工事中の東院庭園隅楼をのぞむ

研究室紹介

埋蔵文化財センター国際遺跡研究室

国際遺跡研究室は、2001年の独立行政法人化に伴って新たに埋蔵文化財センターに設置されました。奈良国立文化財研究所の時代にも、ユネスコや国が主催する文化財に関する国際交流・研究協力事業に協力してきましたが、独立行政法人化に際し、研究所設置目的の項目に、はっきりと「文化財に係る調査・研究に関する国際交流・協力等の推進」が謳われ、文化財に関する国際貢献が研究所の重要な業務分野になりました。国際遺跡研究室は、このような経緯によって設置されましたが、現在、定員1名、室長1名で運営しています。奈良文化財研究所では、主として埋蔵文化財に係わる調査・研究・保存修復・整備部門で交流を計っています。

業務は、奈良文化財研究所に係わる海外交流全般を対象としていますが、主たる業務は奈良文化財研究所が実施するすべての国際共同研究動向を把握し、研究所内外からの聴聞に応じて情報を公開することです。現在、研究所は、次に述べる7件の国際共同研究を実施しています。内3件は、中国との共同研究であり、中国社会科学院考古研究所とは、唐長安城大明宮内の苑池太液池の共同発掘調査、河南省文物考古研究所とは、鞏義市黄冶に所在する唐三彩窯跡並びに産品に関する共同研究、遼寧省文物考古研究所とは、三燕文化遺産に関する共同研究をおこなっています。韓国とは、国立文化財研究所と古代の生産遺跡と都城に関する共同研究を実施しています。以上の共同研究は、我が国の古代文化成立を東アジア世界の文化圏の中に位置づけ、その起源を明らかにすることを目的におこなっています。

カンボジアとは、アンコール遺跡保護整備局との間で協定を結び、アンコール文化遺産に関する共同研究を実施すると共に、現地若手研究者の育成にも協力しています。チリ共和国とは、イースター島のモアイ石像の保存修復に関する共同研究をおこなっています。その他、外国からの訪問者に対する対応、国際協力事業団・国際交流基金等の他機関に協力して専門家養成、研修等の事業にも係わり、東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター・業務課と提携して実施しています。

(埋蔵文化財センター 巽淳一郎)

飛鳥藤原宮跡発掘調査部遺構調査室

遺構調査室の具体的な業務は、発掘遺構関連資料の整理・管理と遺構そのものの研究、それに建築関連遺物の調査・研究です。

前者は、発掘調査に際して作成した遺構カード・日誌・実測図、測量成果簿、空撮データ等々、要するに、発掘調査における遺物以外の成果物・情報を管理し、そのデータを駆使して遺構の研究をおこなうことです。単に発掘データの管理といっても、調査部創設以来、30年間分ありますから容易ではありません。後者は、例えば、山田寺回廊の出土部材のような、建築関連遺物の調査と研究があげられます。

遺構調査室の構成メンバーは3人。室長を除く2人は庭園と建築の専門家で、発掘調査は研究所に入所してからまさに現場たたきあげです。1年のうち3ヶ月の調査期間は、考古学専門の同僚に負けじと奮闘の日々が続きます。

また、室員はそれぞれ文化遺産研究部の遺跡研究室、同部建造物研究室を併任しているので、庭園の実測調査や古民家の調査などの仕事もあります。そこで欠かせないのが、補佐してくれる3人のアルバイト女性陣。手際の良さは逸品で、時には室員も注意を受けてしまいます。彼女たちの主な仕事場所は製図室。年度末は奈文紀要をはじめとする出版物の図面作成に追われ、多忙を極めていきます。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 箱崎和久)



遺構調査室を支えるスタッフ（製図室にて）

古代庭園に関する研究集会 とシンポジウム

遺跡研究室は、古代庭園に関する調査研究と遺跡整備に関する調査研究を二本柱としています。今回は古代庭園に関する調査研究の現状を紹介します。

この研究は日本の古代、とくに飛鳥、奈良時代の庭園の特色と成立の背景を解明することを目的としています。このため日本国内の庭園関連遺構としては城之越遺跡（三重県上野市）など古墳時代以前の水辺の祭祀遺構を含めて検討しました（平成13年度）。平成14年度は島庄遺跡、石神遺跡など飛鳥時代の庭園遺構をとりあげました。研究の第3年度にあたる平成15年度は平城宮東院庭園など奈良時代の庭園遺構を対象として研究を進めています。その一環として平成15年12月18・19日には奈良時代の庭園遺構に関する研究集会を開催し、また、平成16年2月4・5日には中国、韓国の古代庭園と日本の古代庭園を比較検討する目的で「日本・中国・韓国の古代庭園シンポジウム」を開催しました。

近年、日本各地で発掘調査が進み、これは庭園ではないのか？というような石を使った祭祀遺跡や、飛鳥時代、奈良時代の庭園遺構も数多く発見されています。前者の研究集会は奈良時代庭園の特色を明らかにするとともに、こうした形が生まれてくる淵源を探ることをメインテーマとして討議しました。

一方、中国でも西安市にある唐長安城大明宮の庭園であった太液池の発掘調査が奈良文化財研究所と中国社会科学院考古研究所との共同でおこなわれるなど、これまでもっぱら文献をたよりに復原されて



中国広州市・南越国の庭園遺構（紀元前2世紀）

きた中国古代の庭園の姿を遺構にもとづいて考えることができるようになってきました。韓国では慶州で1975年からおこなわれた雁鴨池の発掘調査が画期的でした。その後、扶余、益山などでも古代の池が発掘調査され、情報が

豊かになってきました。そうすると、日本の古代庭園にそれぞれの国の影響があるのか、ないのか？あるとすればどのような点か？その差はどうか？などが当然問題になってきます。後者のシンポジウムは中国、韓国から研究者を招き、日本の情報とそれぞれの国の情報をお互いに共有し、上記の問題について意見交換をおこなったものです

シンポジウムでは韓国のお二人の先生に百濟地域と新羅地域の古代庭園の特色を、中国からは3名の先生をお招きし、広州南越国の庭園遺構、洛陽地域の隋唐時代の庭園遺構、唐大明宮太液池の発掘調査成果について発表していただきました。日本側も飛鳥時代、奈良時代の庭園遺構について発表し、最後に3時間にわたり上記テーマについて意見交換、討議をおこないました。その結果、お互いに納得のいくところ、問題点などを数多く確認することができました。（文化遺産研究部 高瀬要一）

■訃報 加藤允彦さん

文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官の加藤允彦さんが、2003年11月22日に逝去されました。加藤さんは京都府教育庁文化財保護課を経て、1977年に奈良国立文化財研究所（当時）に入所、平城宮跡発掘調査部で発掘調査に携われ、その後、1983年～94年まで文化庁文化財保護部記念物課（当時）で文化財調査官等を務められ、94年奈文研へ復帰後、埋蔵文化財センター保存工学研究室長として、研修事業はもとより全国の遺跡整備の調査・指導に尽力されました。2000年に再び文化庁で、主任文化財調査官として名勝関連行政の中核を担われました。なかでも、日本庭園の伝統的保護管理技術の伝承に関する取組みは特筆されるものでした。行政担当者としても優れた手腕を発揮された加藤さんのご逝去は、文化財行政において名勝の概念や範疇の見直しが図られている昨今、大きな損失として惜しみて余りあるものです。名勝や遺跡整備に関わる者といたしましては、加藤さんの研究や行政的取組みの業績をもとに、その発展にいくばくかでも寄与することで加藤さんのご遺志を受け継ぎたいと考えているところです。心よりご冥福をお祈りいたします。

（埋蔵文化財センター 小野健吉）

飛鳥資料館のみどころ (4)

—春期特別展「飛鳥の湯屋」—

飛鳥資料館では、毎年春と秋の2回、特別展示をおこなっています。今回の春期特別展は「飛鳥の湯屋」と題して、前号でも紹介した川原寺鉄釜鑄造遺構復原模型などを展示して4月9日(金)から5月23日(日)の期間(会期中無休)で開催します。

昨年度、飛鳥藤原宮跡発掘調査部が川原寺の北方でおこなった調査で、川原寺北辺を区画する堀や丘陵の東側を利用して築かれた瓦窯などの工房群が発見されました。中でも注目されたのが鉄釜の鑄造施設です。直径2.8mほどの穴の中に、直径90cmほどの鉄釜の鑄型が設置されていました。また、鑄型に鉄を流し込んだ溶解炉の破片もたくさん見つっています。

さらに今回の調査では川原寺の北限を画す掘立柱堀が検出されたことで、川原寺の寺域が南北三町(約330m)と判明するとともに、今回発見された工房群が境内に位置することもあきらかとなりました。寺院の境内に設置された工房の様子がうかがえる例として大変貴重といえます。

今回の展示では、この鑄型でつくられた鉄釜と川原寺の湯屋との関係を想定し、古代寺院の湯屋をテーマに展示を試みました。まず、鑄型から想定される鉄釜がどんなものか理解していただくために、大阪枚方市東楠葉遺跡出土品などの現存する鉄釜を展

示します。また鑄型から想定される鑄造方法を大阪府美原町余部遺跡出土品によって復原的に展示します。

鉄釜は湯釜等に使用されたと考えています。寺院には鉄釜をつかった湯屋がありました。資財帳には多くの釜が記され、温室の記載もあります。しかし、現存最古の湯屋建築である東大寺大湯屋でさえ、延応元年(1239)建立、応永15年(1408)大改造の建物であり、古代の湯屋建築は残っていません。最近になって京都府向日市宝菩提院廢寺で平安時代前期の湯屋遺構が発見されるなど、発掘による湯屋の発見例も増えてきました。今回の展示では、国立歴史民俗博物館に所蔵される永正18年(1521)「上醍醐西谷湯屋指図」とそこから復原される湯屋の模型を展示し、湯屋の構造と鉄釜の使われ方を見ておきたいと考えました。

お風呂好きと言われる日本人のルーツを、古代湯屋と湯釜から探ってみたいと思います。また、特別講演会を下記日程にて開催しますので、あわせてご来聴いただければ幸いです。皆さんのご来館をお待ちいたしております。

(飛鳥資料館 西山和宏)

<特別講演会>

- 5月8日(土)午後2時から 飛鳥資料館講堂
「日本古代の鉄鑄物鍋釜の生産」
京都橘女子大学教授 五十川伸矢

■ 記 録

速報展

- 石神遺跡発掘調査(飛鳥藤原第129次)
平成16年1月21日(水)～約2ヶ月間
飛鳥藤原宮跡発掘調査部資料室玄関ホール

研究集会

- 保存科学研究集会2003
国際講演会：日中における古代壁画の保存修復
平成16年2月6日(金)午前9時50分～
平城宮跡資料館講堂

講演会

- 欧米の庭園考古学とその歴史学への貢献
ミシェル・コナン博士
(ハーバード大学ダンバートン オークス研究所)
平成16年1月22日(木)午後3時～5時
平城宮跡資料館小講堂

重要文化財指定記念展

- 平城宮跡大膳職推定地出土木簡と
北浦定政関係資料
会 期：平成16年3月2日(火)～14日(日)
会 場：飛鳥資料館
国の重要文化財指定(平成15年5月)を記念する展示で、おもな展示資料は次のとおり。

- ※平城宮跡大膳職推定地出土木簡 9点
「寺請 小豆一斗 ……」(第1号木簡)
「主殿寮 請火事 ……」
「請常食朝夕 ……」
「紀伊国日高郡 ……」
「撫滑海藻」ほか
- ※北浦定政関係資料 11点
「平城宮大内裏坪割図稿」
「畝火山之図」
「瓦器碗図」
「松のおち葉」
「天平尺」ほか

■ お知らせ

春期特別展 —飛鳥の湯屋—

- 会期：平成16年4月9日(金)～5月23日(日)
会場：飛鳥資料館 会期中無休
入館料：大人260円、高大生130円、小中学生無料

編集 「奈文研ニュース」編集委員会
発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp>
Eメール jimu@nabunken.go.jp
発行年月 2004年3月